

圖 版 解 說

一 須菩提像（釋迦十大弟子の内） 奈良市 興福寺藏

乾漆著色立像 高一・五〇三米 座高一・六糧

二、三 阿修羅像（天龍八部衆の内） 同

乾漆著色立像 高一・五三〇米 座高一・一糧

是等の像に就いては既に幾多の解説があり、あまりに周知な遺品であるので、茲に更めて説明する迄もないことであるが、偶々本誌所載の小林剛氏の論文「興福寺十大弟子像及び八部衆像の傳來に就いて」に關聯して、此の兩像の寫眞を圖版に附すると共に、各その一聯をなすものゝ現存せる諸像の寫眞を一束して挿圖に收録して置いたから、その外廓を略述して置かう。

須菩提像は溫容な童顏をなして、身に遠山袈裟を纏ひ、兩手は屈臂して胸前に交叉し、右手にて袈裟の端を握り、左手は掌を後方に向けて五指を伸し、素足に木履を穿つて、洲濱座上に直立の姿勢をとつてゐる。色彩は殆んど剝落し古色に燦染して居るが、瞳に墨を入れ、脣に朱を點じ、襟邊に綠青、袈裟の表に胡粉、裏に朱、衣の内側に綠青、木履に朱を施したる跡が尙殘存してゐる。かくして像全體に支那古代の泥像に見る如き清楚にして素朴な趣致が漂うてゐるが、その顔面には人間性の内面の複雑なる變化が巧に表現されており、衣襞また自然の態を拵へてよくその簡化が行はれてゐる。ただその姿勢に圓滑自在の妙なく一分の硬直感の尙脱しきれぬまゝになつてゐるはその像身の内部に木骨が用ゐられてある爲でもあらうが、これ天平當初の様式の然からしむる處で

あらう。その製作年代に關しては之を興福寺傳來のものとなす説と額安寺古像となす説とによりて異つてくる。前者に依れば興福寺縁起を典據として天平六年の作となし、後者によれば年代不詳となるのであるが、本像の彫塑的技法が東大寺法華堂の諸佛（天平五年作と考へられるもの）と相近きものであるより略同代の作と認めることは大過なからうと思ふ。

而して釋迦十大弟子像の現在興福寺藏のものは本像の外に、

迦旃延像 高一・四四二米 洲濱座上に木履を穿つ。

富樓那像 一、四九一米 同

羅睺羅像 一、四八五米 洲濱座上に沓を穿つ。

目犍連像 一、四八八米 洲濱座上に木履を穿つ。

舍利弗像 一、五三〇米 同

合せて六軀にして、他の迦葉、阿難陀、阿那律、優婆離の四軀は何れの時にか散佚してしまつた。現存のものゝ中舍利弗像のみが今、同寺金堂に安置され、須菩提像は東京帝室博物館に、殘りの四軀は奈良帝室博物館に出陳されてある。尙、曾て大倉集古館に、舊興福寺藏釋迦十大弟子の内優婆離尊者と傳稱せる一軀が所藏されてあつた。同像はもと破損甚しく故竹内久一氏の手に依つて重補完成されたもので、その姿態はもとより、木骨乾漆にして全身綵繪を施したる技法等より、散佚した十大弟子の一軀と推定され得るものであつたが惜しむらくは大正地震の時烏有に歸してしまつた。

尙また木骨形體のみを、興福寺舊藏十大弟子像木骨と稱するものが世に二個ある。一は東京美術學校所藏にかゝり、他は雜誌「寧樂」第九號所收の寫眞圖で知るところのものであるが、後者の所在は今、詳でない。東京美術學校藏の木骨は細い角柱を中にして、左右に細い丸柱を立て、これに扁平な楕圓又は雲

形に削つた板を四個取付けたる極めて簡単な木組より成つてゐる。而して下部に裾の一部と杳を穿いた兩足（但し左足先缺失）が残存してゐるのであるが、この部分は寄木刳合せの木彫に彩色を施したもので、彩色の剝落甚しく、唯、僅に衣襖の間隙に緑青及び胡粉、足に胡粉、杳に朱の跡が遺存するのみである。

であることはその傳稱について再考を要求する。唯この上部の木骨は乾漆像の骨子とも考へられるものである以上、もと乾漆像の下部の缺失を木彫にて修補し、後、上部の乾漆の部分が壊滅されて現存の状態となつたものと考へれば考へられぬことはいふ。尙言へば興福寺盪觴記西金堂の條に「右十大弟子

十軀八部衆八軀 貞永元年壬辰十二月十七日修覆」とあるを本像下部木彫の修補の時と符合して考へられもするが、何等の根據があるわけでなく、たゞ傳説を傳説として單に想像するに過ぎないことである。

傳優婆離像 大倉集古館舊藏（國華より）

東京美術學校藏

傳十大弟子像木骨

法量は木骨頂より足底に至る高約一・五〇米、裾張約三三糎、足底長約一九・五糎にして、之を須菩提像の像高一・五〇三米、裾張三三糎、足底長一九・五糎に比較すれば略同型の原像が想像さるのである。然乍須菩提像の全身乾漆をもて形成されて居るに反して、是れは分厚の感銘を伴ふ木彫より成れるもの

次に天龍八部衆像はいづれも木骨乾漆、全身著彩にして、洲濱座上に直立の姿勢をとり、その形態の彫塑的技法にはなほ自由の感に乏しいが、その顔面の表情には複雑なる内面の動きが鋭く表はれ居り、手足に寫實的簡化の表現をとつてゐる等は總じて十大弟子と同一な技法よりなるものであり、従つて同一作者の手になるものであることが首肯される。就中、阿修羅像は三面六臂の像にして、中央面は朱色を帶び溫顔玉の如き純眞な表情を含み、擧めたる眉の下に爽朗なる目を見開きて、いひしれぬ懷しみを與へると共に佛說法場の侍供養の衆として、外護精進の意氣を示す一種の威嚴を藏してゐる。胸に瓔珞を懸け、左肩より右脇下に彩色寶相華文様の條帛を纏ひ、下體に彩色丸紋の裾を着け、木屐を穿つて洲濱座上に直立してゐる。腕臂に環釧を嵌めてある上肢六本のうち眞の手は合掌し、その右手の臂より先は後補の木彫にて、掌だけが固有のものであるが、各指より鐵線露出して指頭は皆缺失してゐる。左手も亦各指先が缺失してゐる。中の手は左右相稱に屈臂し、その右手は第二第五指の前半及第四指先缺失、鐵線が露出し、左手は第一、第二、第三、第四等の指先、及び第五指の前半が缺失、すべて鐵線が露出してゐる。而して上の手も亦左右相稱に屈臂して掌を上方に向けて各指を開き伸ばしてゐる。

る。右手の各指先は僅に損じて居るが、左手は第二指を除く他のすべては缺失鐵線が露出してゐる。而して木像と一聯をなす他の天龍八部衆像は五部淨の胴以下缺失し殆んど胸像として遺存せるものを除いては、すべて際立つて目に著く程の補修もなく色彩の跡も部分的には鮮明に残り、保存状態は比較的完好を保つてゐる。五部淨の同寺寶藏に收められてある外は七軀とも現在奈良帝室博物館に出陳されてある。左にその法量を示せば、

加樓羅像	高一、四九七米	座高一二、二二二米
緊那羅像	一、四九四米	一二、二二二米
摩睺羅像	一、五三七米	一一、二二二米
乾闥婆像	一、六〇三米	一二、二二二米
五部淨像	自象頭頂至下端 〇、四八八米	自頂至顎 二、四二二米
畢婆迦羅像	一、五六一米	一二、二二二米
鳩槃荼像	一、五一二米	一一、二二二米

以上の名稱に就いて、寺傳と文部省調書とに多少の差異がある。即ち文部省調書に據れば、寺傳にて乾闥婆と云ふを緊那羅、沙羯羅と云ふを摩睺羅、緊那羅と云ふを乾闥婆と稱し、是れは主として高野山金剛峯寺藏の佛涅槃圖記入の名稱等によつて定めたものと云ふから、茲では此の三軀の名稱に就いては文部省調書に準據した。但し文部省調書にて寺傳の五部淨を天、畢婆迦羅を龍、鳩槃荼を夜叉と單稱してゐるが、是れは何れをとるも同意義のものであるから寺傳のまゝの名稱を用ゐた。

尙また釋迦十大弟子像及び天龍八部衆像の作者に就いては古來犍陀羅國人問答師と傳へられて居るが、最近之を否定して正倉院文書によつて佛師將軍萬福の作なることが判明したと源豐宗氏編「日本美術史圖録」の阿修羅像の解説中に記してある、尙十分なる考證を経た上でなければその眞疑の程は遽に定め難いが注目すべき一説と思はれる。(菅沼)

四 千手千眼觀世音像

京都市 妙法院藏

(丸尾彰三郎「再び三十三間堂諸佛に就いて」參照)

五、六 天蓋

京都市 教王護國寺藏

(望月信成「教王護國寺藏飛天模樣天蓋に就いて」參照)

七 傳宋汝志筆 籠雀雛圖

東京市 侯爵 淺野長勳氏藏

掛幅装 絹本着色 竪二一・五二 横二一・八二

宣和畫譜を検すれば雀竹圖といひ梅雀圖といひ棘雀圖といひ噪雀圖といひ引雛雀圖といひ雛雀圖といひ雀兔圖といひ捕雀猫圖といふの類、唐の刁光以後雀圖の著録せらるゝもの頗る多く、宋の黃居采の如きは十指を屈する程で、以て野に山にはた野端に如何にかのいたづら者が支那に於ても各時代を通じて人間の感興を動かし作家の畫心を唆かしたかが窺はれる。今我國に傳ふる尤品としては一に根津氏所藏の雨中竹雀圖(「ぬれ雀」とて古來著名なるもの、例の雜華室藏印記あり)、二に淺野侯所藏の本圖即ち雛雀圖を挙げ得る。根津氏の水墨圖はさて措きつ、淺野侯の雛雀圖を觀るに是は南宋畫院に流行した眇たる小幀であつて、その勾勒淡彩の畫態もまた南宋畫院通途の風趣である。此に於てか古人は此畫を宋南渡後景定年畫院待詔の人として圖繪寶鑑に著録する宋汝志號碧雲の筆に歸したが、果して古傳の據るべきものあるか、或は養川院狩野雅信が今の筈書を囑せらるゝに當つて始めて自己の鑑識を示したのか、探幽縮圖常信縮圖でも見ねばそれさへ極められず、勿論畫上にはその左肩のはづれに古印記の一片を看れども印文不明、しかも恐らく舶載當時既に存した藏印記に過ぎざるべきこと夙く藤懸學士の想像せる如くである。

本圖の傳來乃至筆者は夫れ此の如く不明確である、しかも一たび其畫に對す